

令和7年度 年度末自己評価書

愛南町立平城小学校

【評価基準】 A:目標を達成 B:8割以上達成 C:6割以上達成 D:6割未満

1 正しい子

重点目標	評価指標及び目標値(期待される姿)		評価	考察(◇)及び改善方策(◆)	評価資料	アンケート結果				
						肯定割合	4	3	2	1
挨拶ができる子を育てる。	指標① 進んで挨拶をしているか。 目標値 児童・保護者・地域住民・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇前年度末と比較して、全ての領域で肯定割合が向上している。年間を通して人権委員会が行っているあいさつ運動や6月の代表委員会での取組などにより、児童の挨拶への意識が高まったことが要因の一つだと考える。 ◆挨拶の習慣化や個による取組の格差への対応は、今後も必要である。児童会を中心とした挨拶への啓発を続けながら、保護者と協力し家庭への投げ掛けを行う。	児童アンケート①	94	53	41	6	1
					保護者アンケート①	78	23	55	19	3
					地域住民アンケート①	92	42	50	8	0
					教職員アンケート①	88	18	70	12	0
		年度末	B	◇前期と比較して、肯定率はほぼ横ばい状態である。人権委員会や代表委員会で話し合い、様々な形で挨拶運動を行っているが、成果を実感できるほどの変化は見られていない。2学期は、代表委員会からの提案で「平城小チャレンジ」の項目を考えたところ、全学級から挨拶を頑張りたいという意見が出た。挨拶の習慣化が課題であることは、児童も自覚している。 ◆挨拶の習慣化は、学校・家庭・地域が一丸となって取り組まなければ、大きな向上は難しいと考える。学校としては、教職員と児童が一丸となって取り組む必要がある。教職員・児童会ともに機会を捉えて、挨拶の大切さを投げ掛けていく。	児童アンケート①	93	50	43	6	1
					保護者アンケート①	79	19	60	18	3
					地域住民アンケート①	88	25	63	12	0
					教職員アンケート①	93	7	86	7	0
返事ができる子を育てる。	指標② 返事がしっかりとできていますか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇前年度末と比較して肯定率が児童は9%、教職員は2%向上している。これは、学級などで機会を捉えて返事の指導を行ってきたことが要因だと考えられる。 ◆正しく返事ができる児童を賞賛したり、全体の場で紹介したりするなど、学校生活全体を通して、返事の指導を継続し、意識の継続と意欲の向上を図る。	児童アンケート②	91	42	49	8	1
					教職員アンケート②	88	12	76	12	0
		年度末	B	◇中間期と比較して肯定率が児童は6%低下しているが、教職員は12%向上した。これは、代表委員会で決定したことを継続して行ってきたことで、教職員は児童の成長や改善を肯定的に捉えたのではないかと考える。一方で、児童は評価基準が明確になり、自己評価が厳しくなったと考えられる。 ◆できている場面を具体的に認め、児童の自己肯定感を高める指導を継続していく。また、教職員が率先して気持ちの良い返事を行う『返事のシャワーキャンペーン』週間を設定し、子供たちが返事を「義務」ではなく「コミュニケーション」として捉え直す仕掛けを行う。	児童アンケート②	85	35	50	15	0
					教職員アンケート②	100	7	93	0	0
学校関係者評価委員の意見	・知らない人にまで挨拶をするのは難しいと思われる。友達や地域で知っている人にきちんとできるようにすれば良い。 ・子供たちの挨拶を求めるのではなく、地域から子供たちへ挨拶を行うよう呼び掛けてもよいのではないかな。 ・返事は根気強く継続して指導することが大切である。			学校の対応	挨拶に関しては、引き続き児童会や人権委員会による児童の主體的な取組を推進していく。また、返事指導においては、正しくできる児童を称賛しながら、根気強く指導に当たる。 挨拶に関する話題を学校だよりに取り上げ、地域の方からの挨拶への協力を仰ぐ。					
	・挨拶や返事は「義務」ではなく、「コミュニケーション」であるという考え方は良い。相手を認め相手のことを思っていることにつながる。ぜひ児童会と人権委員会がタッグを組み、「心のつながり」に特化した活動を実践してほしい。 ・教職員の日頃の行動や、子供たちへの声掛けも重要である。				挨拶や返事は「義務」ではなく、「コミュニケーション」であることを全面的に押し出し、心を耕す指導を継続して行う。また、児童会や人権委員会を中心に、「心のつながり」を意識した挨拶や返事の取組を推進する。さらに、教職員が率先して気持ちを込めた挨拶や返事を行うことで、児童の実践しようとする意欲を高めたい。					

2 考える子

確かな学力の定着と向上に努める。	指標③ 授業が分かっているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇児童94%、教職員100%が肯定的に回答しており、前年度末と比較してほぼ横ばいである。全体としての評価はA判定であるが、「あまりよく分からない」と回答している児童も6%いる。また、学力の個人差が大きく、日々の授業で個に応じた指導を継続することが難しいという実態もある。休み時間や放課後に補充学習をしているが、十分な時間の確保ができないことが課題である。 ◆TTによる授業や計画的な補充学習を設定し、個への指導・支援に努める。また、機会を捉えて習熟度別やコース別学習を取り入れ、児童の実態に応じた指導を行う。引き続き、ICTを活用して学習内容の定着の確認を行い、授業改善に努めるとともに、児童の主体的な学びにつなげる。	児童アンケート③	94	49	45	6	0		
		年度末	A	◇児童95%、教職員100%が肯定的の回答をしており、中間期と比べて横ばいのA判定である。細かく見ると、「授業があまり分からない」児童が減り、「とても分かる」児童が少しだが増えている。学力の個人差に大きな変化は見られないが、個に応じた指導を心掛け、「分かる」授業の実践に努めた成果であると考えられる。 ◆2学期は授業研究も多く、授業改善を目指して実践的な研修を行うことができた。それらを各学級の実態に応じて取り入れているところである。研修したことを生かし、今後も一人一人の「分かる」を目指した授業改善に努める。	教職員アンケート③	100	6	94	0	0		
	指標④ 授業でICTを積極的に活用しているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇児童92%、教職員94%が肯定的に回答しており、授業でICTを積極的に活用したことがうかがえる。現在、ICT活用は授業に定着してきたものの、授業における児童の使用頻度や理解度については差がある。 ◆学習の質を高めるために、授業研究を通して、ICT活用の目的や場面に応じた効果的な活用方法等を研修することが必要である。学習支援アプリに加え、調べる・まとめる・発表する・意見を共有するといった児童の主体的な活動を取り入れ、学力の向上と深い学びにつながる授業づくりに努めていく。	児童アンケート④	92	24	68	8	1		
		年度末	A	◇児童97%、教職員100%が肯定的に回答し、目標値である「90%以上」を大きく上回る結果となった。これは、中間期の課題を踏まえ、ICT活用に対する教職員の意識統一や授業改善が進んだこと、また、調べる・まとめる・発表する・意見を共有するといった主体的な学習活動を取り入れた授業づくりが広がった成果と考えられる。 ◆今後は、ICTを活用する場面や方法を更に精選し、児童一人一人の理解度や学習状況に応じた活用を工夫することで、学力の向上と「深い学び」につながる授業の充実を図っていく。	教職員アンケート④	94	53	41	6	0		
	指標⑤ 家庭学習を毎日15分×(学年)以上しているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇児童・保護者ともに肯定率が80%を超え、前年度末と比較して評価は向上したが、肯定率はほぼ横ばいである。各学年の目標時間に応じた家庭学習の量を考えたり、個に応じた課題を出したりしてきたが、家庭学習の取り組み方に個人差が大きいことが、肯定率が向上しない原因だと考えられる。 ◆家庭学習の習慣が身に付いていない児童が一定数いる。そのため個に応じた課題配信等、これまでの取組を継続するとともに、発達段階や個の実態に応じて、家庭学習の習慣が定着する手立てを講じていく。また、保護者にも実態を理解してもらい、連携して学習習慣の定着を図る。	児童アンケート⑦	81	49	32	13	5		
		年度末	C	◇中間期と比べ、児童の肯定率は横ばいであるが、保護者の27%ができていないと回答し、C判定となった。2学期は学校行事も多く、放課後の活動や習い事、社会体育などで、家庭学習の時間が確保できなかったことが考えられる。しかし、すくすくカードからは、ゲームや動画視聴などに時間を費やしていることも大きな原因であることが分かっている。 ◆家庭学習の手引きやすくすくカード等の活用による家庭学習の意識付けを継続し、さらに宿題の質や量の改善を図ったり、ICT機器も活用したりして個に応じることができるようにする。また、学校だより等に家庭学習の習慣化についての項目を掲載し、保護者との連携をより強化しながら、学習習慣の定着を図る。	保護者アンケート②	83	22	61	13	4		
	指標⑥ 読書習慣が身に付いているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	D	◇前年度末と比較して肯定率はわずかに上がったものの、ほぼ横ばいである。学校では、朝読書の時間や宿題としての読書、本の福袋の貸し出しなど、読書の機会が得られるよう工夫してきた。しかし、児童が家庭で読書の時間を確保できなかったり、保護者が読書している様子を見る機会が少なかつたりするため、児童の肯定率に比べ、保護者の肯定率が低くなっていると考えられる。 ◆児童の希望する図書や人気シリーズの図書を購入するなど、図書を工夫して整備し、図書館に足を向けるきっかけづくりを積極的に行う。また、読書週間を中心に、図書委員会に働き掛け、友達や家族を巻き込んだ読書の取組を実施する。	児童アンケート⑧	68	30	38	23	9		
		年度末	D	◇本の福袋の活用や週末の宿題としての「読書」、読書週間を活用したりして読書の習慣化に努めてきたが、前期と比較すると肯定率は横ばいである。しかし、読書週間中の調査を見ると、全校の平均読書時間は1日当たり25分(前年度16分)と向上し、週に3回以上読んでいる児童の割合も9割(前年度8割)を超える結果になった。前年度よりも意識的に読書を推奨することができた。 ◆本の福袋や宿題としての読書、児童が希望する図書の整備を継続する。また、国語科などでの読書単元を充実させるための図書の購入や、学習物の紹介や掲示も行う。児童が家庭で過ごす時間の確保や、保護者が読書をしている姿を見せる機会を増やすことは難しいが、意識的に読書に対する取組を行うことで、読書に親しむ機会を作っていく。	保護者アンケート④	42	12	30	43	15		
	学校関係者評価委員の意見	・授業がよく分かっていることは、学習意欲の高まりにもつながる。また、個別に習熟度の把握をすることは大切なことだと考える。日々大変だと思うが、様々な子供たちへのフォローを継続していけば、子供たちの学ぶ意欲は持続できる。 ・読書については、「進んで本を読んでいますか。」というアンケート項目になっているが、読書のみを問うのではなく本に関する項目を取り入れてはどうか。 ・保護者の読み聞かせや親子読書は、保護者の時間確保が難しい。家庭では、本や図書館に関する内容を日常的に会話できると良い。 ・読書の魅力を引き出すような仕掛けがあると良い。				学校の対応		引き続き、ICTの効果的な活用により、「分かる」授業の実践に努める。一方で、児童一人一人の理解度等を適切に評価し、可能な範囲で個別学習を継続していく。 読書週間には、量を増やすことではなく、いかに楽しく本を読めるかということを発達段階に応じて指導し、読書に親しむ態度を育成する。また、家族で本や読書に関する取組を可能な範囲で行ったり、Bookピクニックや本や読書に関する会話をしていただくよう協力を仰ぐ。読書習慣の定着に関するアンケート項目については、来年度へ向けて質問事項の変更を検討していく。				
		多くの児童が授業を理解しているのは、効果的なICTの活用や個別最適な学習が実践できていることが一つの要因となっている。児童一人一人に応じた授業を展開したり、宿題を与えたりするなど、確かな学力の定着と向上に向けた授業改善を引き続き行う。 読書習慣の定着については、これまでの活動を振り返り、改良を加えながら児童の読書意欲を高める取組を行う。特に本の整備については、児童の興味あるジャンルや内容を選定し図書室を更に充実させる。										

3 強い子

健やかな体を育てることに努める	指標⑦ 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇前年度末と比較して、肯定率はほぼ横ばいである。昨年度の取組を継続したため、マンネリ化していることも大きな原因である。しかし、すくすくカードやノーメディアデーの継続的な取組は、児童自身の生活を見直す良い機会となっていると考える。 ◆一方通行ではあるが、保健だより・食育だよりを継続して発行し、保護者への啓発に努める。特に、生活改善に関する内容を積極的に取り入れ、保護者との連携を図りながら健やかな心と体の育成に努める。	児童アンケート⑨						88	55	33	9	3
		年度末	B	◇中間期と比較しても肯定率は横ばいである。マンネリ化している面はあるが、すくすくカードを根気強く継続したことが、日常生活を見直す機会となっている。 ◆基本的な生活習慣の定着については、引き続きすくすくカードや保健だより・食育だよりにより各家庭に啓発していく。また、今年度から立腰タイムの実施、ノーメディアデーに合わせたchromelによる目の啓発マンガの配信を行っている。実施期間としてはまだ浅い方であるが、こちらも継続していくことにより基本的な生活習慣の定着を図る。	児童アンケート⑨						88	53	35	7	5
					保護者アンケート③						85	43	42	14	1
	指標⑧ 目標値 児童の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇前年度末と比較して肯定率が15%向上している。体育授業における「できる・わかる」を基盤とした達成感や成就感が、運動に親しもうとする前向きな気持ちを育むことができた要因だと考える。 ◆体育科の授業を更に充実させるとともに、放課後の体育的活動や運動会等で自己の目標を持たせながら取り組ませる。伸びや達成感を感じられるよう活動を工夫し、運動に親しむ児童を育てる。	児童アンケート⑩						86	54	32	11	3
		年度末	B	◇中間期と比較して肯定率が微増している。これは、体育学習の充実に加えて、多くの児童が放課後の陸上練習に参加したことが要因になっている。また、昼休みには校庭に出て元気に遊ぶ様子が見られるなど、日常的に体を動かす児童が増えている。 ◆休み時間や休日にマラソンや縄跳びを行うなど、日常的に運動時間を増やせるような取組の更なる充実を図り、進んで運動に親しむ児童を育てる。	児童アンケート⑩						89	56	33	10	1

学校関係者評価委員の意見	・メディアやスマートフォンなどの動画を夜遅くまで視聴すると、十分な睡眠を確保できにくいことから、ノーメディアデーは大変良い取組である。その時間を読書に充てることもできる。 ・早起きは大切な習慣だが、まず睡眠時間を確保することを意識させたい。また、学校生活を送る上で、朝食の摂取は非常に大切であるため、その必要性をぜひ家庭に呼び掛けてほしい。 ・休日の実施ではあるが、ボルダリングやトランポリンなど多様な運動に親しむ機会はある。可能な範囲でいろいろな活動を取り入れてみてはどうか。	学校の対応	引き続きノーメディアデー実施し、基本的な生活習慣の育成の一助とする。また、保健だよりを通じて、十分な睡眠時間の確保や朝食の重要性について、再度保護者に啓発していく。 様々な運動に興味を持たせるとともに、各公民館主催のスポーツ教室等の参加を積極的に呼び掛ける。また、児童が休み時間や放課後に体を動かせる活動ができないか、関係機関に呼び掛けるなど模索していく。
	「すくすくカード」は、児童の家庭生活を見直す一助となっているため継続して行う。また、その結果を考察し児童に返却したり、「保健だより」に記載したりして、親子で振り返りができるように呼び掛ける。「早寝早起き朝ごはん」は健康的な生活を送る上で重要であるばかりか、規則正しい生活習慣の定着につながるため、朝の会等で機会を捉えながら指導していく。 休み時間は屋外で体を動かす児童が多く見られるが、一輪車や鉄棒など児童が普段行わない運動を紹介することで、児童の興味関心を高める。また、体育科において日常的に取り組める運動を知らせ、運動時間の確保に努める。		

4 生徒指導

生徒指導の徹底と健全育成に努める	指標⑨ 楽しく学校生活を送っているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇前年度末と比較して肯定率はほぼ横ばいである。1学期の目標の達成に向けて努力した結果、ほとんどの児童が学校生活への意義を見出していることが要因であると思われる。一方で「楽しく学校生活を送れていない」と回答した児童もいる。これは、児童が問題を抱えた時に、対応が後手に回ってしまったことが原因であると考えられる。 ◆日常からの児童の観察を行い、安心して学校生活を送れるようきめ細かな支援を行うなど、未然防止に全力を注ぐ。また、毎月の生活アンケートやジブンミカタプログラムを活用し、得た情報を教職員間で共有して積極的な生徒指導を行う。	児童アンケート①①	98	65	33	1	1
		年度末	A	◇「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の割合が若干増加しているが、中間期と比較して肯定率はほぼ横ばいである。これは、定期的なアンケートやジブンミカタプログラムの活用にも努め、個別指導が必要な児童に対して早めに対応したことが要因である。一方で、否定側に推移している保護者も見られ、家庭との連携が課題と考えられる。 ◆日常的に児童の観察を行うとともに、毎月の生活アンケートやジブンミカタプログラムを継続して活用し、積極的に情報収集を行う。また、得た情報を家庭訪問や電話等で保護者に積極的に周知することで、家庭との連携を強化するなど、児童が楽しく学校生活を送ることができるように体制を整える。	保護者アンケート⑤	97	53	44	2	1
					児童アンケート①①	97	63	34	3	0
		保護者アンケート⑤	97	45	52	3	0			
学校関係者評価委員の意見	・ほぼ全員が学校生活を楽しめているのは、教職員の努力の結果である。今後も一人も取りこぼすことのない生徒指導に努めてほしい。		学校の対応	児童の言動に目を向けるとともに、アンケート等を活用して情報収集を積極的に行う。また、児童の心情等に異変が見られる場合は、教職員間で速やかに情報交換するとともに、日常から行動連携できるよう体制を整えるなど、未然防止に全力を注ぐ。						
	・児童の意見を見ると、「できた」、「できるようになった」という感想が多く、学校が成長の場として機能していることがうかがえる。 ・ジブンミカタプログラムは、「なりたい自分はこうだ」と考えたり、自身を振り返ったりするなど、自分を見つめ直すことができる。今後も気持ちや考えていることを聞く機会を設け、児童理解に努めてほしい。			児童一人一人の見取りが重要である。これまでのアンケートに加え、積極的に対話することで児童の不安や悩みに対処していく。また、成長したことやできるようになったことを中心に振り返りを行い、次年度への更なる成長へとつなげる。						

教職員の人間力・指導力・組織力の向上に努める	指標⑩ 研修の自己研鑽に努めているか。 目標値 教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇教職員全員が肯定的に捉えている。これは、校内研修や校外研修に積極的に参加し、自身のスキルアップに繋がっている教職員が増えていることや、成功事例や課題を共有し、互いに学び合う体制が取れていることなど、教職員自身の努力と意識向上が要因であると考えられる。 ◆引き続き、研修会やミニ研修を充実させて互いに学び合う機会を確保していく。また、目標チャレンジなど各教職員が自分の課題や関心に基づいた研修を主体的に行い、教職員間で情報を共有しながら個のレベルアップを図る。	教職員アンケート⑤	100	53	47	0	0
		年度末	A	◇前期に続き全教職員が肯定的に捉えている。これは、一人1回の研究授業をほぼ計画通りに実施できており、部会研究が充実していたことが要因である。また、教職員全員が意欲的に研修し、自身のスキルアップに対してポジティブな姿勢を持っていることも良い結果につながっていると考ええる。 ◆個人の自己研鑽が自分の中だけで完結するのではなく、得た知識を教職員全体で共有する仕組みを強化していく。また、本校は専門性の高い教職員が多い。定期的な授業研究だけでなく、空き時間等を利用して授業を参観するなど、互いのスキルを高め合う体制を引き続き構築していく。						
					教職員アンケート⑤	100	47	53	0	0
学校関係者評価委員の意見	・教職員は、子供たちの良さを積極的に見付けて様々な教育活動に取り組んでいる。しかし、多忙さがストレスになっていないか心配である。各自リフレッシュし、楽しみながら職務に当たってほしい。 ・教職員は、時代の流れやICTの利活用、児童や保護者の多様性などの課題に対して、教育理念に基づいて行われなければならない。本場に複雑で大変な仕事になると思う。そのような中でも、本校の教職員は児童の成長を促すために日々努力している。	学校の対応			2学期は各教科主任の授業研究会が予定されており、専門性を生かした実践が期待できる。互いに学び合う校内研修を充実させ、個人や全体のレベルアップを図る。 また、教職員自身がゆとりをもって児童と関わることができるよう、ライフワークバランスを心掛ける。					
					本校は専門的な知識や技能を身に付けた教職員が多く、また授業研究会も盛んなため、研修の場が確保できる。研究協議で学び合ったことを共有したり、日常的にベテラン教職員に教わったりしながら、互いのレベルアップを図っていく。 管理職は、教職員一人一人の業務内容等を考慮し、働きやすい職場環境を整える。					